

翻字『奥州征伐記』(五)

藤 沢 毅

A Reformation of "Oshū-Seibatsuki" (5)

Takeshi Fujisawa

前号に引き続き、『奥州征伐記』を翻字していく。この作品の成立問題などについては、拙稿「絵本平泉実記」の典拠」(『文教国文学』38・39合併号 平成10・2発行)に少しく触れてある。

底本略書誌

架蔵本。文政十年写。大本十卷十冊。

縹色表紙。左辺題簽、墨書で「奥州征伐記」。

見返し、序、総目録、なし。扉題「奥州征伐記」。

凡例

- ・私に句読点、濁点、「」「」を補い、また段落を設置した。
- ・本文中には平仮名、片仮名ともに使用されているが、特別意図的に強調されている箇所を除き、平仮名に統一した。
- ・今、氏などは、それぞれ「より」「とも」(あるいは「ども」と直した。「こそ」の意で使用している「社」は「こそ」に直した。
- ・一文字の繰返しは、平仮名の場合「ゝ」「ゞ」、片仮名の場合「ヽ」「ヅ」、漢字の場合「々」にした。複数文字の繰返しは、三文字以上

翻字『奥州征伐記』(五)

でも「く」に統一した。

・漢字は、多少の例外を除き、基本的には現在通行されている字体に統一した。

・明らかな誤写もそのままの形で出し、右に(ママ)と付注をした。

ただし、意味が不明確になる場合は該当箇所の下に()で正しい形を置いた。欠字の場合は「」で補った。

・いわゆる「見せ消ち」の状況は採用せず、修正後の形のみを記した。
・明らかに脱文がある場合は、その箇所に(脱文あり)と記した。



奥州征伐記(見返し貼付け丁表)

十本之内 武清(見返し)

奥州征伐記巻之第五 目録

北条尾形等諸軍勢寄手に加はる事

九十九三ツ瀬合戦 梶原源太鞠を射る事

由利八郎八郎惟平捕はるゝ事

并 義盛惟平を助命する事

高衡平泉へ帰る事

平泉本陣合戦の事(一才)

奥州征伐記 巻之第五(1ウ)

北条尾形等寄手に加はる事

文治四年九月廿五日、九州の住人豊後守清原真人実俊、尾形三郎惟義、菊地治郎重俊等、奥州へ馳せ参す。又、鎌倉御留守居役たりと雖、合戦身方毎度利を失ふと聞へしかば、大膳太夫三好鎌倉入道善信、因幡守大江の元広、御留守居に残り、北条四郎時政、鎌田兵衛尉、藤井利長、掃部頭藤原の親義等、九州の輩を相伴へ、其勢十四五万余騎にて奥州御陣に参るに仍て、敗軍の鎌倉勢大に勢ひを得て、平泉へ押寄せ（2才）勝負を一戦に決せらるべしと、各々軍議を評せらる、所に、今日参じたる九州の輩、東国の輩と先陣を争そはる、と雖、源頼朝御一世の先陣は畠山治郎重忠相務るに、既、治承四年に極めらる、に仍て、今更是を改めければん事成難く、然れば西国の輩に於ては、先陣に加はつて、万事畠山の下知に随ふべき由を仰出されける。彼是の勢を合せ、廿四万余騎にて白川の関より進発し玉ふ。

平泉には安津加志の城破れたりと雖、高衡鎌倉殿を二十里の外へ追出し奉りしかば、少しは其色を直す所に、寄手に軍勢加はり（2ウ）て勢ひ強く成る由を聞て、各々合戦の用意なす。然れ共、安津加志より平泉迄四个所の難所有。所謂栗原、三ツ瀬、九十九平方と号し、何も要害を構て軍勢を置、旁への要害は九十九の砦也。

頼朝卿九十九の橋に着かせ玉へ、此川は代々の哥人詠じ置かれし橋也。折節、景時、同源太景季、同平治景高、君の左右に居たりしを、御前に召され、

「此所は名にしあふ九十九川也。一首なくては過行事無念也」と仰せられければ、源太景季鞍壺に畏て（3才）

陸奥の勢は味方に九十九橋

渡してかけん泰衡が首

と仕りければ、君大に御感有て、是を繰り返し御詠吟有り。矢立を召寄せられ、自筆に此哥を遊ばされ、「今日の汝が笠印にすべし」迎、景季に給はり、思召用有れば、「今日の合戦には先陣に加はる様に」と仰出さ

れ、各々は聞て、

「誠に梶原は其身弓馬の家に生れたりと雖、係る名哥を仕り、御感に預り奉る事、是文武の達人と云べけれ」

と羨まざるは勿りけり。

景季は御自筆の笠印を賜はる上、（3ウ）思召の旨有て、先陣に加へられしかば、只討死と志し、親兄弟にも暇を乞て、手勢三百余騎を引具して、先陣にこそ進みける。

九十九三瀬合戦 梶原景季鞠を射る事

去程に、先陣の大將畠山庄司治郎重忠、副將軍は梶原源太左衛門尉景季、侍大將豊後守藤原の実俊、尾形三郎惟義等、真先に進んで近付し九十九の砦、大手には由利八郎惟平、二万余騎にて固めたり。其次栗原の城には鳥海四郎季衡、二万余騎にて籠る。第三三ツ瀬（4才）には樋爪五郎高衡五千余騎にて相守る。一、二の砦の勢は二万余騎なれば、三の砦には三万余騎にてもかたむべきに、僅五千余を以、籠りたる高衡が勇猛の程こそ恐しけれ。

先陣の勢、既、近付しかば卯の花威しの鎧に碁石頭の甲を着し、重藤の弓に染羽の矢を負ひ、連銭葦毛の馬に乗たる武者一騎一陣に進んで名乗りけるは、

「梶原平三景時が嫡男、同源太左衛門尉景季とて、日本一の剛の者、鎌倉八人の射手ぞかし。我と思はん人には源太が一矢を受けて御覧候らへ」と申ける。城中よりは是を聞き、

「誠に音に聞へし（4ウ）梶原とて鎌倉にぞ一、二の者ぞかし。源平の軍に数個度手がらを頭はして、弓は養由をも恥ざる由。哀れ何也共射させて掌の程を試み候らへかし」

と云ければ、則、鞠を竹に挟み、大手の櫓に立させ、城中より申けるは、「楯を通し物の具を射るは此国の者にも余多有り。然れば、珍らしから

ず。此鞠を射させらるゝに於は、日本に肩を並ぶる者有べからず。御弓勢の程を知らんが為、城中の者共見物仕候間、急ぎ是を遊ばせかし」と呼はりける。鞠は皮にて作りたる物なれば、和らかにして是を射る時は、矢の迹違ひたる計りにて射通す事（5才）の難し。又強く射る時は忽挟みたる竹より外れ落る物にて、決して射恐き物也。去れば、八的に往昔加へぬれば、近代是を除きたり。

景季殆ど難義也と雖、鎌倉殿八人と名乗し上に、鞠は射まじきとは云難し。敵は櫓の上に袖を連らねて見物す。味方にては、若し射損じなば万人の物笑ひにならんと片唾を呑んで守り居る。

私に曰、軍中には鞠を用ひまじきものと思ふに、第一入べき物也。

敵の亡し其首を実検する時に、或は火にて印し、是を首として実検する也。但し外の墨にては書べからず。必消し墨にて書べし。鞠と云は元しやうが首を片た（5ウ）どりしもの也

景季思へけるは、

『鞠は射通すべき物に非ず。只下より匙上て射落さんには如じ』

と、雁股を取り出して常の箭と二筋分て、暫し堅めてヒヤウと放つ。矢一筋の如く見へて鞠の下を鳴り響きて通り、矢は向ふへ落ければ、鞠は二、三間上にはづみ上て、少も脇へ曲がらずして、唯蹴上し如く真直ぐに落て、又二、三間はづみ上る。其時景季高らかに「アリヤ」とぞ声を掛けたりけり。敵も味方も是を見て、『養由は此梶原也』と、「射たりやく」と感じける。

其後景季散々に射けるにぞ、（6才）楯も鎧も溜らず射通しける。理り成る哉。鎌倉第一の精兵たり。去れば、弓力は剛の者也。関東にて第一と指されたる畠山重忠さへ、景季が弓は張事得ざりしと也。城中よりも景季をば射落さんと指詰め射たりける。由利八郎惟平下知して、

「矢軍計りにては詮なし。進めや者共」

由利八郎生捕らるるを義盛助命する事

去程に大に戦ふと雖、寄手は大軍にて、殊に新手の（6ウ）西国勢、命限りと攻立れば、栗原へこそ逃行ける。大将惟平は、士卒を落し延させんが為に、遙迹に扣へしを、源太景季弓と矢打番い、へうと射るに、八郎が馬の太卜腹を射抜たり。馬は前膝折て墮と伏す。宇佐美平治実政、天野石馬允遠景馳せ参り、八郎を馬より引落す。八郎が郎等、兩人打て懸るを景季散々に射る故、郎等共寄る事叶はず。其間に惟平を押へて、終に生捕けり。

景季は八郎が馬を射たればこそ、実政遠景生捕りける。然れば、梶原が高名を盗める也。去れども（7才）源太是に拘はらず、却て兩人に向ふ者を防ぎける。景季が心底、名譽の者也。

今日の高名の第一の筆に成る所に、遠景走り来り、

「惟平は某が生捕たり。全く実政が高名には非ず」

と云に仍て、兩人論に及ぶ。鎌倉殿聞し召、何れも定め兼させ給ふ所に、和田義盛の曰、

「いか様成る鎧を着たる者の生捕しとぞ、惟平に問はるべし」

と申されしかば、「是最上の事也」と、則梶原平三に申付て問はしむるに、白き水旱紫系威しの鎧を着し、大番頭軍の間は侍所諸士の別当を兼たれば、弓杖突て立乍、（7ウ）惟平に向へ、

「汝は泰衡が方に於、名有者なれば、偽りは云べからず。汝を生捕たる者は、いか様の鎧を着たる者ぞ。真直に云べし」

と云。惟平甚だ怒て、

「己れは兵エノ佐が家来か。我が主人御館殿は既三代鎮守府將軍たり。汝が主の鎌倉殿には係る無礼は有べからず。況や己れ如きをや。汝は征夷將軍の家ならずや。我は鎮守府將軍の家来。対様の身として立はだかつて尾籠をなす己れが云事を、某返答すべきか。頗る憎き奴ツ哉」

と一言も云はざれば、さしもの景時も赤面して、「此者の悪口の外云事なし」と御前に（8オ）帰りに申上しかば、二品聞し召、

「夫れは汝が無礼成るに仍て也。義盛参られよ」

と仰らる。則、義盛、敷革を手に携へ、惟平が前に敷、座して礼義を正して云様、

「昔平治の合戦に義朝横死に逢給ふ。頼朝当国に遠流せらるゝと雖、運強く、今既、天下の武將と仰がる。然れば武士の戦場に出て、敵に生捕らるゝ事、全く恥にあらず。努々恥と思はるゝべからず。但し、御自分は泰平の内にて英雄の聞へ有に仍て、恩賞を貪らん為、高名を争ふ輩多し。更には是を分難し。以前に無礼有る故、申されざる處理り也。是却て足下の（8ウ）面目たり。いか様の鎧を着したる者、足下を組せしならん。悉く承り申たき所也」と云。惟平聞て、

「左宣ふは和田義盛殿か。誠に士也。前キの男には似ず、甚だ礼義を存じ玉へる御方也。去れば、今日梶原景季が為に馬を射られ倒れ候処へ、黒糸威したる者一番に馳せ来て、某を馬より引落す。其後に来る輩は不分明」

成る由を申ける。仍て宇佐美平治実政が高名に極りたり。

二品彼男の勇成るを感じられ、仰られけるは、

「汝が主の泰衡は既、鎮守府將軍として両国に威勢を奮ふ。然るに（9オ）先日之の如く成る合戦をして敗軍に及ぶ事は何事にや。」

惟平が曰、

「往古、平治の合戦に御父左馬頭義朝卿は、待賢門の夜戦に一時も保玉はずして京都を落延、尾州に於、命を落し給ふ。然れば、先日安津加志落城に及ぶと雖、未だ君、当国へ入玉へて既、百日に及と雖、未、平泉へ入事を得玉はず。是を以、思へば、泰衡こそ遙の手柄者にて候」

と申せば、二品御一言なく、御簾をおろされ、疾々首を刎べき由仰せる。

義盛曰、

「何の仕出し給ふ事もなきに謂れざる御対面（9ウ）有るに仍て、君を恥しめ奉る。渠誠に大勇の者也。敢て殺すべき者に非ず。其故は、渠君に悪口なす故に御怒り甚しく、舌をも引抜かるゝべきに、却て助けられしに於ては、其大胆を感じ奉り、渠が如き勇氣の者を顧める時は必ず変ずる事有べからず。且つ又、国の為に成べき者なれば、助けん事勿論也」と申されしかども聞入給はず。『戦場に君臣の礼なし。既、諸士の別当として軍の支配を任せらるゝ上は、何を憚るべきや』と惟平を呼んで、「御自分の武勇を感じられて、二品（10オ）助くべき由を仰せらるゝに、急ぎ能帰らるべし」と申されしかば、惟平思ふ様は、

「某飽迄悪口せしかば、一入重罪せらるべきを、却て助け返さるゝ事、誠に鎌倉殿の御心こそ多べけれ。斯有ればこそ天下をも取り玉へり。去るにても某生どられし身の何面目有て能帰らんや。只此上の厚恩には早く首を刎らるべし」と云。義盛の曰、

「弓矢取る身の敵に捕らわるゝは少も恥にあらず」

迎、手械禁め解て、馬鞍太刀等を与へ返しける。

高衡大に感じて、「頼朝は謀ごと拙しと雖、義を行はるゝ折には、人の及ばざる事仕給へり」迎、「助返さるゝ事（10ウ）泰衡悦入候」と使者を以、賞じたりしかば、義盛曰、

「御覽候へ。渠一人誅せし迎、何の事か候はんに、助返さるゝに仍て御威勢、既、六郡に轟き候也。然れば君は浩る事に於ては構はせ玉ふべからず。君は征夷大將軍の御名正しければ、政道は我々共宜く沙汰すべきなれば、君の行はるゝに及ばず」

と申て、御前を退出しける。

惟平は勇弁を以、主を恥しめず、又主の誉れを顕はし、其上命を助り、義盛は明徳と以、君命を恥しめず、然れば渠は管異期也。是伏龍也。義

盛の智は鎌倉の無尽（11オ）蔵也。高衡惟平が勇は陸奥の鉄山也。

高衡平泉へ帰り入る事

九十九の砦破れ奥州勢栗原へ逃行しかば、二品相續て攻よせらるゝ。先陣は替らず畠山重忠也。相伴ふ人々には四国の新手段、并に下河辺庄司行平、足立右馬允遠光等也。惣じて御勢廿三万八千余騎とぞ聞へたり。栗原を守る所の奥州勢は鳥海四郎季衡を大将として二万余騎にて控へたり。是は栗原の合戦より程に会釈らへて、三ツ瀬の砦へ退かせ、誠の（11ウ）勝負は三ツ瀬にて極むべしと、兼て議したる事なれば、強ち此所にて功を立んとも思はざりしかば、暫く戦て、今は能時分也と思ふ時、奥州勢栗原を退て、三ツ瀬の要害にて待懸たり。鎌倉勢も追つかふて攻懸る。

此三ツ瀬と云へる処は、昔より哥人の説ならはして、陸奥の三ツ瀬川とて尤堅固の砦也。高衡態と九十九、栗原へは二万宛を遣はし、其身は五千余騎を卒して此所を堅めたり。軍の備は元は大勢を置こそ法なるに、是は前に大勢を置、後には小勢を以守る事、前後違へり。然れ共、（12オ）此五千余騎と申は、父秀衡入道存命の時、子共多しと雖、高衡計りは役に立べきものと思へ、兩國数万の勢の内にて、勝りて付置く五千余騎の者共なれば、外の勢十万よりは大に増れり。去れば、子を見る事、父に如かずと云へり。入道眼力違はず、多き兄弟の中に一人増りて奇妙の戦ひをなす。抑、渠が為に大木戸の最初より奥州の滅亡迄に、高衡が為に討たれし鎌倉勢算るに違あらず。高衡三ツ瀬の砦には季衡を置、又、平等が岡に由利八郎を六万余騎にて控へさせ、其身は五千余騎（12ウ）を八ツの社の内に備へしかば、鎌倉勢先づ平等の廻りを打囲む。時に高衡は後の小勢には目も懸ず、畠山が勢の内へ猶予らはず、真一文字に喚て駆る。畠山是を中に取込め討たんとするを、高衡東西を駆破り南北を馳廻て堅横無尽に薙立てば、畠山の陣散々に破れて、八方へ崩れ立。高

衡二陣に扣へたる上総介高弘が勢の中へ駆入り、是をも打破り、次第に斯如くに駆て打程に、第八陣迄駆破て御本陣の旗本武田兵エ有義、伊沢五郎信光が三万余騎にて控へしを見て、「是こそ甲斐源氏と（13オ）号して異なる鎌倉殿の御一門ぞや。一人も余すな。打とれ」と云儘に、五千余騎の者共堅様横様、蜘蛛手十文字に喚て懸れば、信光が勢大に破れて開き靡く。夫より江戸、川越が陣へ打入る。是は畠山の一族にて、名匂ふ（名に負ふ）勇士共なれば、高衡が勢を真中に打囲んで、四方より切て懸る。高衡事共せず、陽に開き、陰に囲みて、七転八倒して戦ひしかば、江戸太郎長重、川越次郎高重、忽討死して其陣終に打破らる。其次、工藤左エ門祐経、仁田四郎忠常等が陣々を散々に馳破り、第廿八番の笠井、宇佐美が備へをも一捲りに追ちらし、後へ（13ウ）駆通り見れば、五千余騎の内、七十二騎討死す。高衡一息繼もあへず、又敵陣の後より駆入次第に破て帰りける。

成田五郎介綱が陣の前を通りし時、成田、諸岡兵衛弥三、刑部少輔行綱、一手に成て懸阻るを、高衡、爰に頭はれ彼所に紛れ、千変万化に薙廻りしかば、終に成田五郎介綱、諸岡兵衛重綱、弥三刑部行綱、乱軍の中に討たれけり。此成田五郎は去ぬる一の谷の合戦に、熊谷平山諸共に抜駆したる勇士也。又、諸岡兵衛は、此度、鎌倉十人の力者たりと雖、高衡が郎等を突兼、与三と云者の為に（14オ）討たれける。高衡後より先陣迄、悉く打破て八ツの社の内へ馳入、其勢を改め見るに、五千余騎の内、百四十騎討たれけり。

爰に平等が岡に控へし由利八郎、時分由とや思へけん、六万余騎を前後に立、

「先日生捕られし由利八郎惟平、鎌倉殿に助命せられ、再び此陣に扣へたり。先日御札謝仕らん為、駆出る所也」と云もあへず、真一文字に喚て掛る。其勢ひ、偏に雲雨を帯て泰山を巡るに異らず。高衡是を見て、

「惟平を生どられては恥也。助よ、者共」

と横合より駈立しかば、鎌倉勢終に大崩れして九十九迄こそ逃たりける。
(14ウ)

去れば奥州勢六万余騎、鎌倉勢廿三万八千余騎、謀ことなき懸合の戦ひに打勝、敵を遙に追捲りしは、高衡が手柄の程、勝て云べき所に非ず。係る所に泰衡の方より使者を以、

「搦手根津ヶ関破れて、寄手既、平泉へ追討のみならず、宇田行方も破れて、敵両方より打入るよしを告る間、早々大手の合戦を打捨、平泉へ帰り、本陣を堅めらるべし」

と告たりしかば、高衡、鎌倉殿の御陣へ使者を立て、

「是にて挑み戦ひ申べき所、搦手根津ヶ関、并に宇田、行方等破れて、御勢平泉へ打入るのよし聞へ有る故、(15オ)我々此場を退き本城平泉へ立帰り候間、あれにて見参に入るべし」と申送て、靜に平泉へ帰りけり。

平泉本城合戦の事

去程に比企藤四郎義員は、出羽の国根津ヶ関を破て、陸奥に打入りける。蒲三河守範頼卿も行方を破て、平泉へ攻寄らる。大手は栗原、三ツ瀬等の皆破れて、二品既、近付玉へば、鎌倉勢都合三十六万九千余騎とぞ聞へける。高衡三方の敵を一度に引受、小勢を以、大軍を大半討なしかる事、古今独歩の名将也。

十月十四日、既、大手搦手三方の(15ウ)寄手三十六万九千余騎、一同に押寄、各々向ひ陣を取りて仕よせ付れば、城中にも廿四万余騎を三方へ分て防がす。先、大手へは鳥海四郎季衡、太田冠者師衡を大将として、搦手へは厨川六郎俊衡、本吉冠者を両大将として遣はす。中の手へは川北冠者、新田冠者を大将として、泰衡は大将軍なれば本丸を堅めて働かず。樋爪五郎高衡は三方の内、弱からん方を助くべしとて、後ろ武

者に成て扣へたり。今日申の刻に鎌倉殿御陣をよせ玉ふに、程なく日暮て月は東山の端に寛々と出たり。冬の月冷まじと雖、鎧の真甲の星光り渡り、四方(16オ)三十里が間は金の砂を蒔し如く也。二品、梶原源太左エ門尉景季を召されて、「昔より月は弓張りと言事如何成る故」と御尋有りければ、景季畏て、

照る月を弓はりとしもいふ事は

山の端さして入ればなりけり

と仕りしかば、二品御感斜ならずして、後に此歌を京極黄門定家卿に御物語り有ければ、是、名歌也とて京極和歌集に入れられしを、世に誤て躬恒の哥など、雖、梶原源太が哥也。二品仰られけるは、

「梶原が弓馬の家に生れしと雖、哥道を(16ウ)能く知り、誠に雲の上人も恥玉へなん。弓矢取て異りしかば、此城の根体は如何見ける」と御尋有り。景季畏て、

「此城堅固の要害にて、力を以、責る共輒く落べからず。只城の位を見て攻べきもの也」と申上る。

先陣々を稠く仰付られて、十六人の番頭を定て、夜廻り稠しく窃に勤めたためばや。是少々の陣は高衡が為に破られ玉ふに仍て也。去れば四方くをば三十余万にて取り巻、三方の敵を一所に受し事なれば、泰衡苦しき事に思へ、「我家の運尽る時来たればか」と嘆かはしく云ければ、高衡が曰、

「努々左様に思召べからず。軍に内の広きは悪き物也。(17オ)然れば、敵を近くよせまじき為、高衡守り、是を防ぐと雖、大手へ向ふ間に、搦手横手、搦(手)を支る間に、大手破れて当城に敵を受候らへ共、今は一所にて寄手を防ぎ候らへば、中々心安く候程に、左而已心に懸る事勿れ。宜しき謀あらん物を」とぞ慰めけり。

翌れば十月十五日。今日は土用なればとて、合戦を致されず、翌日大手搦手二方の矢合せとぞ定められけり。

爰に搦手の大將比企藤四郎也と雖、軍の談議をも申合はさん為、三浦介義澄、同子息平六義村を指遣はされ、又、蒲三河守範頼卿向はせ給ふ。中道へは土肥次郎実平、(17ウ)同子息小早川弥太郎遠景を遣はし、是皆聞ゆる兵ノなれば、宜しく談議すべしとて、差添ける。

去程に十六日卯の一天に、大手搦手同時に押寄、鯨波三度上れば、城中にも関を合せ、敵身方六十万騎の関の声なれば、山崩れ海揺ぎて冷まじく、此平泉と申は、四十八の門有て、各々揚簀戸冠木門也。(揚簀戸冠木門)とは二本の柱を立て、上に一筋の貫の木を通し、屋根なくして戸を上より落す様に拵へたる物也。秀衡富貴也しかば、二本の柱は鉄を以作り、各砲頭丁を打て柱の居石の面テ一丈有りけるを、下へも一丈掘り込、下にて又石の貫木を(18オ)通し、いかなる地震にも崩れぬ様に構て、門の内に又常の門を建て、其間千人の舁形とする也。是係る時に至ては軍兵算へ難き故に舁形を作て千人宛をはかり出す積り也。

私に曰、今に至り陸奥の太守の御屋敷、江戸新錢座に有を見るに、冠木門也。此外はなし。陸奥殿の冠木門、薩摩殿の装束捌き、——是は門の内に又堀一重有て、其堀に火灯口を明けて内より外は見ゆれ共、外トより玄関の見へぬ様に構へたり。(18ウ)是島津殿より外はなし。

斯て敵味方互に矢軍に時を移す所に、大手の櫓の門きりくんと鳴る音すれば、八文字に戸を開き、其齡六句計りにて頭半白なる者一人、健かなる者一人、並び出しが、若者申けるは、

「今是に出候者は当遠流寺に於、諱光心蓮大法師と申者にて、其身は沙門たりと雖、曾て仏道に志さず、武勇の身を事とする僧也。故に秀衡在世の時、還俗致し候。此者若かりし時、専ら手打を鍛鍊して物を外す事勿りしが、既、六十過て又十年を経候へば、(19オ)昔の如く御見物には

得仕間敷候へ共、鎌倉殿遙々当国に入らせ給ふ御馳走迄に心計りの手打を仕て御上覧に備へ奉らん為、御目通りへ罷出候。此者老衰に及びし故、此四、五年言語分ならざるに仍て、某を以、口上を演る也。斯申は是成る心蓮が弟に、無口次郎兼平と申者にて候」とぞ云はせける。手打とは今の手裏劍の事也。此心蓮は手打四十間を越して物立ずと云事なし。是に仍て大場平太景能は、陣より丁楯の表に笹の葉の書たるを出して、「是を遊ばされ候へ」とぞ申ける時、彼若者(19ウ)が曰、

「然らば其丁楯の左に付笹を打たせ申べし」と云も果ざるに、心蓮劍を取て確と打に過たず、楯の表成る笹の葉の後ろへツ、と打抜ける。是をとらせて御覧有るに、長さ一尺計り有て、殊に鍛へたる物也。其後、心蓮件の劍を取返して投たりければ、偏に蜻蛉の如くにして、或は真甲肩骨を打たれ、左右の小手絃走り、せんたんの板、かぶりの板、当る所を嫌なく矢庭に十七人を打殺しければ、

「若かりし時は続けて三面計りも手打仕候へ共、今日は齡傾き、思ふ程には打たれず候間、是(20オ)にて止め候」と一礼して入ければ、各々舌を巻にける。

又、迹より、蛸甲着したる者出て、

「二品遠路の所へ経させられ、此平泉へ御出なさる。泰衡饗応の為、芸有る者余多召抱候間、寔に東の果者なれば、御覧に当る程の事は有まじ。先きの心蓮は手打を以、其名を顕はし候。某に於は名もなき者に候へ共、鉄鎧を鍛鍊仕候。御目に懸申べし」

とて、手鞠の如く成る鉄丸を取て飛はするに、一ツも外る、事なく、鉄丸に当たる者は眼を打潰され、鼻柱を挫かれたる者、数を知らず。(20ウ)

斯て渠も内に入りしかば、又替りたる者出来り。左りの手を以、弓を引に右の手にまして其矢先に中る者、命を落さずと云事なし。又臥して

も矢を放さず、後を向ても弓を引自由をなしてけり。

又迹より入替りに及びけり。是謀ことに敵に空を見上させ、氣を登せさしめ、一時に追ちらさん為也。

私に曰、十五才より内は男女の道を知らざれば、熱氣強くして熱氣頭に上り、瘡を病む。仍て漢土に風をさせて十四、五歳未滿の童には是をのぼせて（21才）糸を引く度毎に空を見さす。甚だ息、口より出て熱氣をさますは是、養生の部也。十五才過れば、男女交る事を知て、其勢ひを失ひ、久しく病と成る。高衡斯の如く鎌倉殿の勢の氣を抜て、討て出駈けちらさんと計る故也。

係る所に大手の門を開き、城兵喚て駈たりしかば、鎌倉勢は渠等が奇妙をなすに氣を奪はれ、余念なき所を思へも寄らず驅出たりければ、寄（手）一戦にも及ず、唯一捲りに追立られけり。去れば、高衡是を追はずして引入、（21ウ）再び出る事なし。是誠の戦ひに非ず。只、寄手を睥る所也。

此平泉の城の廻りに水門有て、其水門を明る時は、忽ち十里が間、海となし、鎌倉勢を流し殺さん為也。既、此日も黄昏に及び、鎌倉殿御本陣に帰り給ふ。和田義盛を始め（招き）て、

「矢軍計りにて其迹有べからず。いかゞして此城を攻落さんや」と仰せられしかば、義盛の申さる、には、

「此所に着せられて、始ての軍也。左様に御心短く思召、永く攻られずしては、年内内には中々落べき城に非ず」と申されしかば、二品重て、

「然らば、今日の如く矢軍計りにて送るべきや」と宣ひければ、義盛の曰、

「先、矢軍計りにて（22才）日を送り候内には、又いか成る軍略をも出来、其間には兎角に会釈い置かんには如じ」

とぞ申されける。義盛逆も神ならねば、足元に浩る大事の有事は知らざ

りけるぞ、危うかりける事共也。

高衡敵方へ凶事を告る事

并 頼朝卿繋留る事

爰に京野小治郎は、三河守範頼卿に向て申けるは、
「此所の御陣營を考へ見るに、死地の氣立上り候。早く此所を退去し給へて然るべし」

と云。三河守殿聞給へ、尤とは思へ玉へしが、（22ウ）惣じて範頼卿は个様成る事をば、疑ひ御用いなき御生質き、夫而已ならず、慥に見定たる事ならねば、聞捨にして二品へは未だ何共言上せず。然るに城中にては高衡一人敵身方の運氣を考へ見るに、身方の運氣能、欣前たり。又、寄手の陣上には死氣一面に立ければ、高衡心中に、『寄手の中に智明の人有て、味方の謀略成まじ。所詮、此方より告知らせて敵を繋ぎ留めべし』と思へければ、軍使を以、申入けるは、

「鎮守府将〔軍〕陸奥守泰衡、舍弟樋爪五郎高衡申越候は、鎌倉殿の御陣上に死氣立登り候間、早く御陣を（23才）他所へ御移し、此凶事を避らるべし。此方にては尋常の合戦をこそ好み申所也。然るに仮令、敵なればとて、非常の難に逢玉はん事を見捨るは本意に非ず。急ぎ御陣替有べし」

との事也。三河守殿も此由を聞玉へ、

「扱は京野小治郎は申せし詞相違なし」

と思へしが、

「先達て此義を言上せざるも分明ならざる故也。然るに今、高衡申送り越す赴きと符合したれば、急ぎ此所を除けらるべし」と頻りに進められけるが、鎌倉殿、曾て御聞入なく、

「範頼の申さる、条心得ず。味方の陣上に死氣立に於ては城中の者は悦ぶべき事成るに、却て（23ウ）告しらすべきの謂れなし。是偏に城中の

者共、四面を取り囲まれ、進退究るに仍て、身方を左ばかり陣替させ、其虚に乘て要害を修補すべしとの巧み也」

とて、聊も御用ひなき故、元来三河守殿は穩便の人なれば、強く争論し玉ふ心もなく、其後は無言也。

斯て鎌倉殿の御返事には、

「凡、戦場に臨む者は、一命を活イキんと思ふべきや。身方の陣上に死氣立たば、勇士の命を捨んと思ふ故なれば、更に忌み嫌ふべき事に非ず。然れば、詮なき使也」

と申返し玉へば、高衡聞て完爾笑ひ、

「扱、謀こと成就して敵を屹と（24オ）繋ぎ留めたり」

と悦びけるが、『此上にも今一度使を以、我計略を堅くすべし』と、重て申遣はしけるは、

「御陣の上に死氣の立事は御望みに思召のよし、仰越さるに仍て、再応申入べき事あらね共、其期に及んで期後悔も有べきか。我等は駈合の軍を好み、不義の勝を心に懸けず。仍て再応申入る、もの也」

此御返事には、

「志し、一入感じ入と雖、斯如く取詰たる上は、一戦にも及ず陣替せん事は、武門の恥辱なれば、仮令死地に落入とても是非に及ばず。足下等も他の事は捨置、城兵の死氣を避らるべし」（24ウ）

と仰遣されける。

是偏に身方に運氣を考へる人なく、敵方より告知らする事故、疑ひ有て用ひられず。義盛に至るまで此運氣を考へる事得ざりしにや、敵方より謀略タカバカるとのみ心得て、実とせざりしに仍て、終に六万余人の軍兵を流死させ、鎌倉殿を始として、諸勢各々辛ふじて死を遁れ、御陣を返されける時、高衡が申送る事を御用ひなく、係る難義に逢へ玉ふ。去れば其節、今の御陣所にも又死氣立由を申ければ、二品も前キに懲り給へしにや、「早々此所を引取れ」と仰せ有りし。（25オ）「四方や此所に凶氣や有

べからず」と各々諫め申けるに、「イヤ、偽りや有まじ。片時も早く去るべし」とて終に野州小山迄逃帰らせ給ふ。

然るに三河守殿は、性質律義の人なれば、小治郎が申せし事を用ひ玉ひ、陣替有て小高き所に備ひ給ふ故、此難義を遁れ玉ふ。彼の所は城中より遙に高く見上、其外、寄手の陣所は目の下に見下し、城の大手には堀もなく、土居を築き門内十三の曲輪有り。本丸の廻りには幅四十四間の堀を掘て、笹川の流れを堰入て、十分に水を湛へたれば、青々として物冷しき（25ウ）体也。又、四面に水門廿八有て、此樋口を切落す時には、城の四方は則時に大海の如くに成る。此水門而已にあらず。一方には大海の潮ウシホを引入る様に拵らへ、佐山が池の水も樋口を抜て流る時は、鎌倉勢の前後左右より一時に流れ来る様に、兼て用意して城中より敵陣を目の下に見下し、扱又四方の水口よりも寄手の陣は遙に低き故、鎌倉殿の御座所は平地の様に見ゆれ共、凹み也。然るに高衡は敵陣を嫌留て、同月廿一日、夜更て、寄手の陣中寝鎮りて前後も知らず臥したる時分（26オ）宵より四方の水辺へ軍卒を廻し置、相図を定て一時に城中の樋口を悉く明けける故、水の漲り来る事、矢よりも早くして、鎌倉殿の陣所くへ一時に流れ来りて、既、三十余万の軍兵、六万余人流れ死しける故、頼朝卿も兎角して死は遁れ玉へしが、旗幕、武具、兵器等夥しく敵にとられ玉へし事末に見へたり。

於二分配原^二 寄手水に溺れ死する事

并 鎌倉勢搦手へ向ふ事（26ウ）

同年十一月廿一日、天氣快晴して辰の刻、日蝕掛る事八分也。

爰に一つの不思議有り。昔より日蝕は其月の朔日、又は二日也。月食は十四日、十五日、十六日、外には極てなき事也。然るに廿一日の日蝕有る事は如何成る事ぞや。唐土、周の世に、日輪五つ並んで出る。我朝にては景行帝の御宇に日輪五つ顯はれ、然る時は必ず其国亡ぶと云伝ふ。

去れば、日本開闢より以来久しく奥羽の兩州既、亡ぶべき前表にや。昔より日蝕する時は吉凶共に行る也。去れば一天の君の皇子だに、日蝕の御誕生なれば十善帝の位に即玉^{ツキ}はず。此日に限ては善政たり共行ふべからず。況や(27才) 刑罪に於をや。去れば人は皆、天の子也。昔より此日は和漢共に戦ひ挑まざるに仍て、泰衡今日鎌倉勢を流死させん事、憚りに思へ共、高衡云は「天子に憎れ奉り、朝敵の名を受たる身なれば、争か天を恐るべきや」と高衡が云へし事、是漢の元帥韓信往亡に軍を出しける時、諸人云は「往亡は往て亡ぶと書。尤、慎むべき日也」と諫めけるを、韓信聞て「往て亡す」と訓じ、却て終に敵討けり。然るに是を名とすると雖、韓信が心とは遙に相違する所也。尤、朝敵の名を得る所は天子に敵するが故也。日月は遍く万国を照らし給へり。然れば(27ウ)是を恐れざるは何事ぞや。謀才賢きには似合ず、今にや高衡が誤る所也。一旦は大利を得たれ共、多くの人を殺したる故、天其罪を免し玉はず、幾程もなく国家を失ひけり。

私に曰、廿一日に日蝕有事は奥羽の兩州亡ぶべきの前表成べし。昔元弘年中、北辰天に在まざる事三年也。果して『太平記』の乱出来たり。是より日本戦国と成る事、凡、二百六十余年也。

斯て此日は日蝕なれば、城中にても、旗を引入て合戦すまじき体に見せ、敵を謀つて鑿にすべきとの為也。然るに鎌倉方(28才)にては、曾て是を知らずして、「扱は城兵の者共、此日戦ひは好まず」と見きり、寄手も旗を取り入て、甲冑を脱、「皆昼夜寝ざれば、今夜は氣をゆるして休むべし」とて、或は囲碁、又は双六を楽しみ、或は又、一族朋友の陣所へ向へ、雑話杯して酒宴し、一日を千歳と悦び、軍勞を晴らしけるに、程なく日も暮けるに、「又明日こそ合戦あらん。疾々休むべし」迎、面々陣所へ帰て前後も知らず寝入たり。

然るに高衡、寄手の陣々へ忍びの者を遣はし様子を伺はせけるに、鐘の音も訝渡り、夜廻りの拍子木等も高々と聞へければ、「偕は寄手の諸勢

悉く油断して(28ウ) 寝入、人鎮まるに随て物音高く聞ゆる也」と、既、子の刻過には高衡矢倉の上に人を上せ、「寄手の陣所へ水溢れ来らん時節を見て太鼓を打立べし」と下知し、又、兼て樋口に軍卒を付置、相待所に、一方は大河の潮を受け、一方は阿武隈川の流れをせき入れける故、其水音冷まじく、鎌倉勢の陣々へ水押来れ共、軍兵悉く草臥、打伏て前後も知らず寝入けり。斯て陣所へも浮き上らんとしける時、漸く目を覚し、起上り、「是はいか成る事にや。夥しき水也」と声々に罵り騒て、周章狼狽しけるを見守すると等しく、「スハヤ、相図の時至れり」と(29才) 大手の櫓々にて一同に太鼓を打立ければ、大河の流れを堰留たる山の手より押来たる水なれば、見る間に夥しく湛へて海の如し。夫而已ならず四方の樋口を一時に抜取りたり。

此節鎌倉勢の陣所は何れも地窪なれば、流水の落るが如く逆浪立て、流れ来て、さしにも広き分配原、四方数里の間、即時に大海の如く也。斯の如くなれば、寄手の陣々狼狽へ騒ぐのみにて、いかん共すべき様なく、時に結城七郎朝光は鎌倉殿の御馬を進らせ、其身、口を取て素肌にて逃げ出、其外父子兄弟の事も思はれず、我先にと小高き所を(29ウ) 尋求て通れんとする内、段々水まして乳丈に余る故、押流されて溺れ死す者六万余人に及びけり。漸々として死を通る者は鎧兜もなく、素肌にも、斯如くなれば水上に浮きたる旗幕、指物、馬印は云に及ばず、種々品々水色も見へざる。浮かみ流るゝを見て、城中より舟を出して悉く是を拾ひ取り、去れば鎌倉殿、八幡殿より伝来の品々を捨て逃給ふ。

扱又、城中にては翌日に至り、此日拾ひ得たる旗五十余、流れを大手の矢倉に立並べたり。此節寄手の中に甲冑を着したるは三河守殿の御家中計也。是偏に京野(30才) 小治郎が申条、信用有て、始より要心せられし故也。其外、大友左近将監義直、宇都宮左エ門尉朝綱、畠山治郎重忠、和田左エ門義盛、宇佐美三郎祐茂、和田新兵衛尉常盛、同三郎義秀、工藤左エ門祐経、以下五十余人のみ也。此外、梶原以下の輩は皆悉

く素肌也。扱こそ関八州の諸士、各々重代の武具、兵器に至るまで、此時多く失ひけり。

斯て翌日水面を見渡しけるに、第一の柵は石垣迄水に浸して深き事数丈也。此故に近辺は偏に海の如し。斯て二品は遙に安津加志迄引取り給へて、三河守（30ウ）殿の鎧兜を所望有て、是を召し給ふ。而ふして、先暫く緑りの岡に御陣を居られけり。

扱又高衡は斯如く敵を追退て、鎌倉殿御陣を開けるに、泰衡聞て、「敵は緑り岡に屯す。此勢ひに駈ちらさば百里の外へ追退ん」と云。高衡聞て、「既、十分の勝をとりたれば、軍を出すに及ばず。某一計を以、遠く追払ふべし」と、鎌倉殿の御方へ人を遣はして、

「緑り岡は尤小高き所なれども、要害の地にあらず。其上、未だ凶氣立上り候。以前申遣す所、御用ひなくして、既、御難義に逢へ給ふ。此度は遠く鎌倉迄も御引取りなくは（31オ）大将の御身の上危ふく候べし」と申送るに仍て、頼朝卿も、「此事いかゞ有るべし」と、諸将へ異見を問へ給ふ。然るに「此所は地形高くして、水の恐れは有まじ。去乍、分内狭く、敵軍襲へ来たらん時は防ぐに便り悪しかるべし」と、各々一同に申けれ共、二品の仰に、「夫程迄には有べからず。先には敵方より云事也と疑ひをなし、却て大敗軍に及び、殊に糧米迄も悉く流したれば、当所に永陣叶ふまじ。一旦此所を引取り、軍兵を催促して、又糧米坏用意し、武具、兵器等調へ次第、又々押来るべし」と（31ウ）仰せければ、御家人の面々、誰一人詞を出す者もなく、我先にと退きける故、鎌倉殿も下野の国、小山迄引取り玉ふ所に、高衡、又小山へ間者を入れて、雑説を云はせけるに、一首の狂歌有り。

高衡は弥陀の悲願は知らねども

多くの人を救ひ上げたり

頼朝卿、是を聞給へ、御忿り甚しと雖、為べき様もなし。然るに此度溺れ死したる輩には、大庭平太景義を始めとして、海老名源八、本間右

馬允、吉川治郎、春日治郎、中条（32オ）藤治以下、名を得し輩数を知らず。扱又平泉の様子を尋問はしけるに、

「彼の出水、十日廿日の内には干落ざる由、然る上は仮令百年攻る共、落城すべからず。第一味方に糧米なければ重て軍せん事叶ひ難し。彼是する内には、他国に異心の者も出来たらんにも計り難し。仍て先、鎌倉へ帰陣すべし」

と仰せける時、下野大棟政光入道進み出て、

「何故鎌倉へ引とらんとは仰せらる、や。兎角此地に御在陣の計略を廻らし、御追討有べし」と諫言しければ、二品は、

「指当り奥州攻難義の由を聞く（32ウ）ならば、其氣に乗じて他国に反逆を企る者有べし」

と宣ひければ、下野入道申けるは、

「仮令鎌倉へ引取り給ふ迎も、計略也とは云はずして惣敗軍に仍て引取り玉ふと心得、却て叛く者出来るのみならず、京都の聞得も宜しからず。御大事忽ち起るべし。又、実に戦ひ負て退き玉ふ事なれば、諸人取沙汰すまじきにあらず。此所に在陣あらんには、軍の勝敗決せざる故、別の子細有まじ」と、理尽して諫言しける故、「然らば此所に在陣すべし」と仰出しければ、諸軍勢各々安堵して陣々を構へける。二品は忍ん（33オ）で鎌倉へ帰らせ玉へしとかや。

斯て冬も半ばに也ければ、今年は殊に雪深く、諸軍寒氣に痛みし上に、兵糧等甚だ無く、第一武具、兵器等不足乍も野州小山に在陣して、殊の外、迷惑に及びける。四方の雪も村々に消ければ、然れば文治五年新玉の正月下旬に及び、頼朝卿鎌倉より小山の陣所へ再び来り給へ、義盛、重忠、常胤等と軍の評議有りしに、

「兎角大手より攻懸りては、以前の如く水難有りて攻落す事難かるべし。

搦手根津ヶ関へ攻入る時は、城中を見卸して責る便り能上に（33ウ）水難なかるべし」

逆、則、三河守範頼卿惣大将として、千葉介常胤を副将とし、和田左エ門尉義盛には軍議の支配を仕、正月廿八日、其勢十七万余人にて小山の陣所を進発有り。頼朝卿は同時に進発有りしが、「搦手を責させ、大手は軍すべからず」と下知し玉ふ。是偏に前の敗軍に懲り玉ふ故、安津加志に在陣し給へ、此所よりは進み給はず、北条四郎時政、同子息小四郎義時、其外の御一族に軍議を任せ、畠山重忠に支配を給はり、二品は万事に構へ玉はずして、数日を送り給ふ。

又、奥州（34オ）にも、再び敵軍寄来ると聞て、又配りを定めけるに、樋爪五郎高衡は十万余人を引率して搦手へ向へければ、敵を追散す事度々也。

去程に、二月廿七日、搦手の矢合せと定て、軍は花をちらしけれ共、大手は安津加志に陣して、曾て軍を好まず。尤、軍奉行は両方へ分れけり。搦手は熊谷小治郎直家、大手へは平山武者所季重向ひける。然るに、平山心中に思へけるは、「奉行を命ぜらる、身が、合戦もなき大手へ向へし事こそ口惜き次第也。後難の事あらばあれ。（34ウ）拔駆すべし」

と覚悟をして、相備の輩を語らへ、僅五、六千にて以前にも懲りず分配原へ押寄せて見るに、水は漸く引けれ共、始めと替り砂地と也し故、足元踏留めがたし。其上、前方は三十万余人にて押詰けれども攻落し得ざりしに、季重僅五、六千の軍兵にて何事を仕出すべきや。只々大手の櫓のみ見詰て居たりしが、「去るにても此所を堅めしはいかなる者にや」と尋けるに、大將は鳥海四郎季衡、川田八郎兩人也。

然るに此川田八郎は、元来泰衡とは親族にして、金（35オ）剛別当秀綱、由利八郎惟平、伊賀羅目八郎重季等に相並んで、家老職として四十余万石を領して、第一の高知也。其上、錦戸太郎国衡に女を嫁したれば、国衡が為には舅也。然れ共、国衡討死の後には女をも父八郎が方へ戻て在

り。去れば「国衡は妾腹也と雖も、惣領なれば、何卒秀衡が家督に立て鎮守府將軍にして、己れも栄花を極めん」と思へ、国衡に種々の悪心を進めて兄弟に向ひ、不義の行へ、泰衡を害せんとしけるも皆此八郎が一人の仕（35ウ）業也。

然るに鎌倉殿も渠放逸成る事を兼々聞及び玉ひければ、いかにもして渠を味方に付んと一向らに工夫を廻らし、此儀に仍て搦手へ向へたる和田義盛を呼戻し給ふに仍て、義盛は本陣に戻りて、専ら謀略を廻らし、彼の川田を味方に引付んと工夫し給ふ。義盛は秘術と智を廻らしけるとなり。

奥州征伐記 卷之第五終（36オ）

—平成十三年九月二十八日 受理—